

真宗大谷派 慈雲山 瑞蓮寺

慈雲会

〒604-8214

京都市中京区新町通蛸薬師下る

百足屋町3 7 5 番地

TEL/FAX (075)221-4616

zuirenji@hotmail.com

http://www.zuirenji.net/

Shinshū Ōtani-ha

Jiunzan Zuirenji

Jiunkai

慈雲



願我未来

不聞惡聲

不見惡人

願(ねが)わくは我(われ)、未来に
悪声(あくししょう)を聞かじ、
悪人を見じ。

【『観経』の言葉】

前回は、この世は地獄・餓鬼・畜生の三悪道があふれている、というところを見てきました。今月は、願わくはもうこれ以上未来には悪人を見たくない、悪人の声を聞きたくないと言っています。これは韋提希夫人の率直な願いなのでしようが善導大師は私たちの予想を超える注釈をされます。

金剛の志を發すのでなければこの願いは本当には適わないというのです。金剛の志とは、仏さまの真実の心の事です。私たちの日常でもそうですが、嫌な人や事に会いたくない、見たくはないといっても実際には不可能です。問題は、悪人がどこかにいるというのではなくて、そう思う自分がいるということなので、その自分が念仏にあうよりほかにないという事なのです。

今月は

帰入功德大宝海

の一句を学びます。

「功德の大宝海に帰入すれば、」と読みます。今回は天親菩薩のお徳を讃えた所の三回目です。親鸞聖人は『一念多念文意』という著作の中でこの「功德大宝海」について次のように述べておられます。「功德」ともうすは、名号なり。「大宝海」は、よろずの善根功德みちきわまるを、海にたとえたまう。この功德よく信ずるひとのこころのうち、すみやかに、とくみちたりぬとしらしめんとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらず、もとめざるに、功德の大宝、そのみにみちみつがゆえに、大宝海とたとえたるなり。」この中で親鸞聖人は、功德というのは名号つまり南無阿弥陀仏の事だと言われています。その南無阿弥陀仏にはさまざまな善根功德が備わっているのでそれを大きな宝の海と譬えておられます。そしてこの功德はそれを信じる人の心のうちに信じる時ただちに満ちてくださるのだとおっしゃっています。そうであるな

らば金剛心の人は、自身は何も知らず、求めるということもしないのに、その功德の大きな宝であるお念仏はその人の身に満ち充ちるのであるからそれを大宝海と譬えるのだというような意味です。

「帰入」というのは、帰依し回入するということとです。私たちにとって南無阿弥陀仏に帰依するとはどういうことなのでしょう。

私がお念仏の教えに帰依する、信順することに先立って、私ひとりの為にどれほど多くの願いがこの身にかけられているかを知ることが大切なのです。天親菩薩は私たちがお浄土に往生する時に得る功德に五種あると言われています。そのうちこの一句は近門といわれます。門は出入りが自由であることを表します。近いということ、私がお浄土に近づくというより私がお念仏に出会うときお浄土の方からこちらに近づいてくるのだ、と言った先生がおられます。私たちはどこまでも自分を主として生きていきますので、私がお念仏の教えに出会う、私に教えを聞くと考えます。そして、お念仏に出会った

私が少しお浄土に近づいたと考えるのです。しかし、お念仏に出会うとき、言いかえたら自分を中心にして物事を見ていた私が、自分がいろいろな物事や人に支えられていたのだと知るとき物の見方が変わります。「私、私といっていたが、私の為だったのか」と受け取れた時をお念仏（仏さまの呼びかけ）が聞こえた時といえます。その時に自我いっばいで生きている私のこの現実そのままのところ（これを娑婆といいますが）に浄土が近づいてくるのです。言いかえたら娑婆がそのまま浄土に転換するのです。お浄土とは、この現実の世界を捨ててどこかにユートピアがあるのではなくて、立っている場所の意味が変わるのです。しかし、私の煩惱がまったくなかったわけではないので、辻とひとつになつたと言わずに「近い」という表現をとるのです。お念仏の教え・声が聞こえた人は、心にも身にもその徳が満ち充ちると親鸞聖人は言われます。そのような方が身近におられるのではないのでしょうか。

【今月のお寺】

瑞 蓮 寺

(京都教区山城第一組)
京都府京都市中京区新町通蛸薬師下る百足屋町三七五番地
住職 浅井仁麿

寺と門徒の垣根がないお寺

今回訪れた瑞蓮寺は、京都市内の中心部、烏丸四条から北西に五分ほど歩いたところに位置している。寺の周辺には、雑誌やガイドブックに掲載されているレストランやカフェが点在し、にぎやかな雰囲気に含まれている。

瑞蓮寺の建立は慶長元年（一五九六）まで遡り、現在の浅井仁麿住職が第十八代目となる。五十六歳の住職が十八代目を継承されたのは今から十四年前だが、継承される前から「槃特の会」という勉強会を立ち上げていた。

「二十年ほど前に一回り下の僧侶仲間と始めました。仏弟子の周利槃特から名前を付けました。槃特さんのように、歩みが遅くてもコツコツ勉強を続けていきたいという願いがありました」と語る浅井住職。

その願いどおり、「槃特の会」は今まで続いており、現在は『相伝義書』を

テキストに『大無量寿経』を学んでいる。参加者で輪読しながら、一文一文を丁寧に読み込んでいく。自分の気付きや疑問などが自由に議論され、とても話しやすい雰囲気の間になっていくのが印象的だった。

その雰囲気は、寺と門徒さんの関係にも表れているように感じられる。私が組内や教区内の行事に参加し関わるようになってまだ数年だが、瑞蓮寺の門徒さんは生き生きとして活発だという印象がある。

「私の中に寺と門徒という垣根はないですね。門徒さんは、寺での経験が楽しければ、周りの人に伝え広めてくださいます。その話を聞いて新たに寺に来てくださる方がおられることも。そこにお念仏のはたらきを感じます」と語られた。

また、門徒会である「慈雲会」は平成十七年に組織されたが、その会報『慈雲』は企画・編集・発行まで門徒さんが担当しており、現在までに四十九号発行されている。さらに、平成二十四年には組が開催した推進員養成講座に瑞蓮寺から九名が参加し推進員となった。その推進員が中心となり毎月第二土曜日の「同朋の会」も立ち上げられ

た。仏法の学びに加え、初参り式や本山報恩講参拝、さらにフォトコンテストやコンサートなど、楽しみながら活動されているのが伝わってくる。

「私が頼りないから門徒さんが自ら動いてくださるんですよ」と住職は謙遜される。坊守さんも「私たちが特別なではなくて、地域に根差した活動をしていた前任職のおかげです。また、門徒さんが話してくださることを丁寧に聞く」ことを大切にしていた坊守の存在があつての今だと思っています」と話され、そのことばが印象に残った取材だった。

(京都教区通信員・本多 真)

(注)この文章は、東本願寺の寺院向けの機関紙『真宗』の7月号に掲載されたものです。月一回発行のこの冊子の名物記事として「今月のお寺」というコーナーがあります。大谷派のお寺は約9000ヶ寺ありますが、その中でその地区の通信員の方々が選んで取材に來られ掲載されたものです。内容がともよくまとまっていますので、通信員の本多さんに許可を得て転載させていただきました。

【写真コンテストのお知らせ】

【テーマ】

「私〇〇にはまっています」
(皆さんが今夢中になっっている事や物の写真をお送りください。)

【応募方法】

お参りに行った際に渡していただくか、メールに写真を添付して左記のどちらかの宛先まで送信してください。

zurenji@hotmail.com (瑞蓮寺)
zeninmaomote@i.softbank.jp(住職携帯)

【締め切り】

平成三十年八月三十一日(金)

※ 昨年よりも締切が早くなっていますので、御注意下さい。

【投票方法】

応募作品は瑞蓮寺書院に貼り出したうえ、平成三十年十一月三十日までの間、参詣者による投票を受け付けます。

【開票・表彰式】

平成三十年十二月一日(土) 午後二時。景品(粗品)があります。

~~~~~ . ~~~~~

## 【瑞蓮寺 行事予定】

今後の瑞蓮寺の行事予定をお知らせします。

平成三十年

九月十五日(土) 午前九時

秋の彼岸の御磨き

九月二十三日(日・祝) 午後二時

秋の彼岸会

十一月八日(木) 午前九時

報恩講の御磨き

十一月十一日(日) 午後二時

報恩講並びに帰敬式

十二月十八日(火) 午前九時

お正月の御磨き

~~~~~ . ~~~~~

【瑞蓮寺 同朋の会】

今後の同朋の会の予定をお知らせします。

平成三十年

九月八日(土) 午後二時

「釈迦の十大弟子③」

十月六日(土) 詳細は後日お知らせ

遠足 南山城方面

十一月二十四日(土) 詳細は後日お知らせ

東本願寺 報恩講 団体参拝

十二月一日(土) 午後二時

第四回写真コンテスト開票・表彰式

~~~~~ . ~~~~~

## 【編集後記】

今年の六月から七月にかけて、地震、大雨、台風とこれまでにない大きな災害が立て続けに起きました。連日続いた猛暑も災害と言えようなすさまじいもので、日中の外出を控えなければならぬほどの暑さでした。

毎日何気なく過ごしていることが、災害等によってある日突然あたりまえではなくなってしまう、そうなるのはじめてそのありがたさが身にしみるといふことがよくあります。

祇園祭も終わりこれからが京都の夏も本番を迎えますが、早いもので写真コンテストの締切日(八月末)が近付いてきました。詳細は上段に記載したとおりですので、皆様お誘い合わせのうえたくさんの御応募をお待ちしております。

田阪裕章